最優秀賞

カレーの中の危機

土浦日本大学中等教育学校
三年　網永莉々

私は驚いた。

カレーライス一杯に一〇九五リットルもの水が使われていたのだ。この水の量は浴槽五杯半に匹敵する。私はこの沢山の水を一度に飲むことを想像した。水が喉につまって、溺れたような息苦しさを感じた。

この数字はバーチャルウォーターという考え方で試算された値だ。バーチャルウォーターとは、食料を輸入した時に、その食物生産に必要とされる水の量である。食料自給率が三十八パーセントと低い日本において、輸入は食料の充分な確保に必要不可欠であり、それと比例してバーチャルウォーター量は莫大となる。過去には日本の輸入食物全てに必要な水は八〇〇億立方メートルという途方もない数字が算出されている。

例えば一キログラムのトウモロコシを生産するには、一八〇〇リットルの水が必要となる。牛はこうした穀物を大量に消費しながら育つため、牛肉一キログラムを生産するには、その約二万倍もの水が必要となるのだ。

バーチャルウォーターの輸入量が多いことには問題がある。それは輸出国の水を過剰に利用し、その国の水問題を悪化させてしまうということだ。例えば、中東オマーンでは、砂漠に囲まれた農場で、日本向けのインゲンを栽培している。年間降水量一〇〇ミリで河川のないオマーンは、水の確保に日々奮闘している。貴重な水は日本へ輸出する食料の為に使われる。遠い国の問題だと思っていた水不足は、実は私達自身の問題だった。

カレーの皿の中で、複雑に国際問題が渦巻いていることに、私は危機感を覚えた。食材の輸出国は豊かな国ばかりではないだろう。私たちが輸入した食品が、彼らの利用できる水を減らし、時には命を奪ってしまっている。先進国が世界の水資源を独占し

てしまう今の世界の経済システムは不平等だ。

ＳＤＧｓは目標の一つに「人や国の不平等をなくそう」と掲げている。豊かな国が開発途上国を追い詰めているようにも見える現状に、私の心は痛みを感じた。私が一口飲むコーヒーが、何も考えずに食べたチョコレートが、誰かを犠牲にしているのだ。

今を変える為に、何をすればいいだろうか。

日本では年間二五三一万トンものフードロスが生まれている。大量のフードロスは輸出国の大量の水資源を捨てていることと同じだ。昨今その無駄をなくす為にコンビニでの廃棄削減への努力は共感できる。家庭でのフードロス削減に私がすぐできることとして、地産地消が考えられる。食べ物も飲み水も自分の住む地域で調達することが、地球環境への配慮、そしてバーチャルウォーターの削減にも繋がるのだ。

私は今日、ビオトープの水田で田植えを行ってきた。泥だらけで足腰も痛くなったが、青空の下で大勢の力で整然と植えられた苗を見て誇らしくなった。ここで育った米は、近隣の小学校の給食や餅つき大会で提供される。自らが作った米を食べ、「おいしいね」と皆で笑いあう幸せを私は体験した。誰も苦しむことのない食べ物。地域の皆で作った米が、私に地産地消の意義を示してくれる。稲作は収穫まで多くの水を必要とする。だが、使った水は循環し、利用できる水へと戻って来る。地産地消は環境負担も少なく、外国の水資源を奪うこともない。私は田作りで世界のためにできる事の一つを身をもって体験した。

日本ではバーチャルウォーターの増加に歯止めがかからない。輸入を完全に断つことは難しいだろう。でも、私達一人一人がテーブルの上で起きている、遠い国の出来事に目を向けることで、世界の水問題の改善に一歩ずつだが、しかし着実に近づくことができる。

人や国の不平等がない世界。私は人々の幸せでできたカレーを作る。